

明日のORに向けて

小笠原 暁氏インタビュー

芦屋大学学長の小笠原暁先生へのインタビューは、平成8年11月28日に行った。ご多忙な先生であるが、この日も、スケジュールの合間を縫って、大阪梅田の近くの毎日新聞社のロビーで、昼休みの時間をとっていただいた。大変楽しく有意義なインタビューであったため、結局、予定の時間をかなりオーバーして、先生の次のスケジュールの直前まで延びてしまったのを記憶している。

報告の前に、先生のご意見の背景を知るという意味で、先生の略歴を簡単に紹介しておく。昭和28年名古屋大学理学部卒、30年同経済学部卒、昭和35-47年神戸商科大学教授、その後兵庫県企画部長、教育長を経て昭和53-59年兵庫副知事、昭和59年より芦屋大学教授、平成7-10年同学長、平成10年4月退任。この間、昭和61-62年度OR学会副会長。

Q：お忙しいところ、大変有り難うございます。早速ですが、ORの現状についてどう考えておられますか？

A：一言で言えば、応用数学、あるいは数学的手法の研究に学会の主力があるように見え、現実からかい離しているという印象があります。そのため、数学に興味を持たない人が逃げて行くという現象が起こっているのではありませんか。経済学における計量経済学のようになっていると言えばよいでしょうか。一方、ORを必要とする現実問題はたくさんあります。しかし、それに参加する努力が足りないと思います。待ち行列や数理計画でも、理論的解析があるのはよいのですが、同時に、現実問題への適用を心がけるべきです。そのためには、たとえば、コンピュータを使ったシミュレーションやCALCなどがもっと重要ではないでしょうか。

Q：じゃあ、ORと現実問題はどう関わっていけばよいのでしょうか？

A：兵庫県の行政に携わった経験から言えば、地域計画、防災計画等、ORが貢献できる分野はたくさんあります。そのころ、埼玉大学、筑波大学、神戸大学

などの政策科学研究科に人を派遣し、OR的な考え方の分かる人の育成に努め、そのような人たちをさまざまな部署に配置するよう努力しました。

具体的な例をあげると、たとえば水資源計画があります。ここでは、ダムはもう造れないという現実があります。用途別の水の供給など、新しいシステムが必要になっています。企業ではリサイクルの努力の結果、水が余っているところもあります。しかし、行政において、現場の人に予測を作らせると、その部署に都合のよい計画になってしまいます。こういうところに、客観的で全体をシステムとして見通すことのできるORマンが参加できる余地が十分あるのですが、残念ながらORにそのような人がいないのが現実です。

Q：そのほか、ORに対して歯がゆく思っておられる例を挙げてください。

A：そうですね。たとえば、リエンジニアリングは話題になっていますが、その前提とも言うべきCALC、さらに情報システムについてORで真剣にやっている人は少ないのではないのでしょうか。また、在庫管理（とくに中小企業、病院の薬品の在庫など）、流通、交通制御など、ORの知識と経験を生かせば大きな効果を期待できる分野はたくさんあると思います。しかし、これらの分野でORはあまり貢献していませんね。行政における委員会でも、工学や経済分野個別の専門家から構成されることが多いのですが、ORのシステム指向の考え方を生かせば、これらをコーディネートする役割ができるはずですが、しかしそのような人材は大変少ないと言わざるを得ません。

Q：大変耳の痛いところです。少し話題を変えて、OR学会と関連学会との関係についてどうお考えですか？

A：先程の私の意見に関連して述べると、松田武彦先生が創られた経営情報学会が、私の言うORの現実的な部分を取り込んでしまったように思います。この分野は本来OR学会が取り組まねばならなかったのではないのでしょうか。また、関連学会、たとえば経営工学会、OA学会など、かなり重複しており、無駄が多

いという印象があります。関連学会の統廃合を含めて、リストラの時期かも分かりませんね。

Q：最後に、OR と OR 学会の将来について一言お願いします。

A：私は OR を計画・管理学というように捉えています。この方面ではオペレーションズ・リサーチという言葉は、いま、ほとんど使われていません。私も使うことはあまりありません。OR を風化させないためには、現実問題を踏まえた OR 教育が重要で、そのような人材を各方面に送り出してほしいと思います。コンピュータが身近になったことを反映した教育が必要です。しかし、大学など旧態然たる講義が多いのではないですか。

私の印象では、今の OR 学会には、リーダーシップ

が不足していると思います。良い意味のセールスマンが必要で、魅力のある企画を立て、企業の人を取り込むことが重要です。世代交代を進め、生きのいい若手に台頭してほしいものです。以前、MIS の使節団を企画したときは、若い人たちも参加し、企業からの参加もありましたよ。

Q：貴重なご意見ありがとうございました。

このように、先生の豊富な経験に裏づけされたご意見には、OR の現状に対する大変厳しい批判が込められている。しかしその中にも、OR の将来を暖かく見守り、心から心配していただいていることを強く感じた。上のレポートから、そのことをお伝えすることができれば幸いである。（インタビューー 茨木俊秀）

連載にあたって

日本オペレーションズ・リサーチ学会は、一昨年、創立40周年を迎えました。創立40周年記念長期計画委員会（梅沢豊委員長）では、この40年間、OR という学問が社会に対して果たして来た役割や学会の歩みを見直し、現在の「学問としてのOR」や「日本OR学会」が抱えている問題を明確にすること、そしてORの更なる発展と普及を目指して、今、日本OR学会が成すべきことは何かを検討し、その結果を学会の長期ビジョンとして策定する活動を行ってきました。その結果は、「創立40周年記念長期計画」として、すでに記念行事配布物や学会誌等を通じて会員の皆様に報告されています。

この長期計画委員会の活動の中で、「ORの先達は、ORの今日の状況をどうみているのだろうか？異なる分野で活躍された先達の意見を聞いてみよう」ということになり、委員が手分けして十数名の方々に直接インタビューを行い、その結果が委員会に報告されました。

ORの先達から頂いた厳しいあるいは温かな貴重なご意見の数々は、もちろん創立40周年記念長期計画に反映されましたが、ページ数の制限から、頂いたご意見のニュアンスまでも細かくは伝えられませんでした。

しかし、各インタビューアの報告を聞いた委員の多くが、「これら貴重なご意見を、委員会の中だけに留めておくのはもったいない。会員の皆さんにもできるだけ生の形で伝えられないか、いや、伝える必要がある」と感じていました。

そこで、その内容を「インタビュー記事」という形で学会誌に掲載することを企画し、本誌の編集委員長にお話したところ、快く連載という形で会員の皆様にお伝えする機会を頂きましたので、今月号から数回にわたって、不定期ではありますが、毎号、お一人分を上記の統一テーマの下に掲載していくことになりました。

本連載記事は、各インタビューアの方々に、口頭でのやり取りを原稿に起こし、できるだけインタビュー当時の雰囲気壊さないように記事としてまとめ直して頂いたものです。

原則としてインタビューに応じて下さった先生方の添削を受けましたが、一部にはご意見の趣旨が十分に文章に表れていない部分もあるかも知れません。そこは素人インタビューアや編集者である我々の技量のなせる技として、お許し願えれば幸いです。

最後に、快くインタビューに応じて下さり、多くの貴重なご意見を賜ったORの先達の方々と、原稿作成に多大な時間を割いて下さったインタビューアの方々に、この場を借りて御礼申し上げます。

（創立40周年記念長期委員会：インタビュー記事担当委員会）